

# 図書館 だより

27

甲子園大学図書館

2022年3月24日発行

## 橄欖<sup>かんらん</sup>の花散りて

副学長 伏木亨

### 腸は考える

幼少の頃にファールルの昆虫記を読んで生物学の道に興味を持った研究者は多い。友人にも何人かおり、専門外なのに昆虫の話は妙に詳しい。学生や若い研究者を生物の形態や進化に引き込む本がある。解剖学者であった故藤田恒夫先生が1970年代に刊行した岩波新書「腸は考える」である。著者は、腸から見た人間の姿を鋭く解剖し、解剖学的哲学を語る。私は一読して著者のファンとなった。

「腸という臓器は、食べ物を消化して排泄するだけの臓器である。暗い、汚い、臭い、の3Kの現場である。腸を研究する変人よりも全身を制御する脳の研究者の方が明らかに尊敬されてきた」と藤田は冒頭に述べる。もちろん彼一流のユーモアである。

### 神経学者とホルモン学者の仁義なき戦い

この本は神経学と内分泌学とのバトルで始まる。犬の条件反射で有名なパブロフは食事によって起こるあらゆることを神経の作用で説明した。これに反発して彗星のごとくあらわれたホルモンの研究者たちとの間で長い抗争が勃発する。

学術的な書であるが、ドキュメンタリー小説的である。英国の2人の学者は1902年1月16日、たった1匹の犬を使い、たった1日の午後の実験だけで、ロシアのパブロフの神経万能説をひっくり返した。腸の神経を切断しても胃酸によって唾液が出ることを証明したのである。

研究はゲームである。実際、藤田は本書の中で「学問というのは人生最高の道楽である」と言う。

さらに、2人の学者は、すり潰した腸管から後にセクレチンと呼ばれる消化管ホルモンを発見する。この日のことは、「偉大なる午後」グレイトアフターヌーンと研究者の間で今でも語り継がれている。

### 抗争の果てに

神経説とホルモン説の抗争は全身に波及し、仁義なき戦いを繰り返す。それでも、今では和解と住み分けが進み、神経とホルモンとを区別しない新勢力がシマを、いや全身を統治している。

神経とホルモン分泌を統一したのが新潟大学の藤田恒夫である。両者の類似を示す山の

ような顕微鏡写真も示された。藤田は「パラニューロン」という新しい概念を発案した。パラとは横に並び立つという意味である。

先生は、脳は考えるが腸も考えるという。寝ていても麻酔状態でも、腸は食べ物を口から肛門側に運ぶ。適量の消化酵素を分泌し栄養素を吸収する。脳ではなくて腸が考えているからだ。

### 藤田研究室を訪ねる

著者の藤田先生の研究室は新潟大学にあり、ここに所属する友人を訪ねて若い頃に何度かお邪魔した。

初めて来た研究者にアカシアの花の天ぷらを食べさせる習わしがこの研究室にはあった。正確にはニセアカシアという名で、初夏の新潟市内や空港に咲き乱れる美しい花である。天ぷらは新潟へようこそという歓迎である。サプライズであったが美味しかった。

### 遊び心に満ちた研究室

毎週末には、研究室の人たちはその週に撮影した組織染色写真や電子顕微鏡写真の品評会を行っていた。臓器の顕微鏡写真は芸術でなければならなかった。秀逸な作品は保存されて、後年写真集として刊行された。その美しさは息を呑むばかりである。

藤田先生は、学内の教職員に呼びかけて絵を描く会を主催されていた。プロのモデルを呼ぶ本格的なものであったという。この会の名は「シャーム・ハーレ」と先生自身が命名されていた。粋な人々である。

住人は明らかに奇人揃いで、他人との違いを表にさらけ出すことに遠慮がない。余計な制約や忖度がないところでは、人間は結構奇人になれるものである。解剖で使った肉類は

「愛する臓器を食べよう」と呼びかけてBBQの集まりが催された。研究室恒例の「あんこう鍋」を食べる会には全国から卒業生が集まった。

### 脾臓を食べる話

先生はある時、「脾臓を食べよう」と言い出された。ベストセラー小説で映画にもなった「君の脾臓を食べたい」とは無関係である。住野よるの小説よりも30年以上も前の話であるから、いわゆるパクリではない。恋愛話ではなく、食欲の話である。

「脾臓はギリシア語でパンクレアスという。パンは「全て」という意味で、クレアスは肉の塊という意味だ。ゼーンぶ肉の塊というのだから、まずいはずがない。」

説得力のある主張である。脾臓は消化酵素を大量に生産する臓器だから、屠殺後の自己消化は極めて早い。とても市場に出回るものではない。当時、日本でこれを食べた人はほとんどないはずである。

新潟市内の老舗レストランであるイタリア軒の料理長を巻き込んで、研究室を挙げての脾臓を食べるプロジェクトが開始された。後日談はこれも藤田先生の著「鍋の中の解剖学」に詳しい。

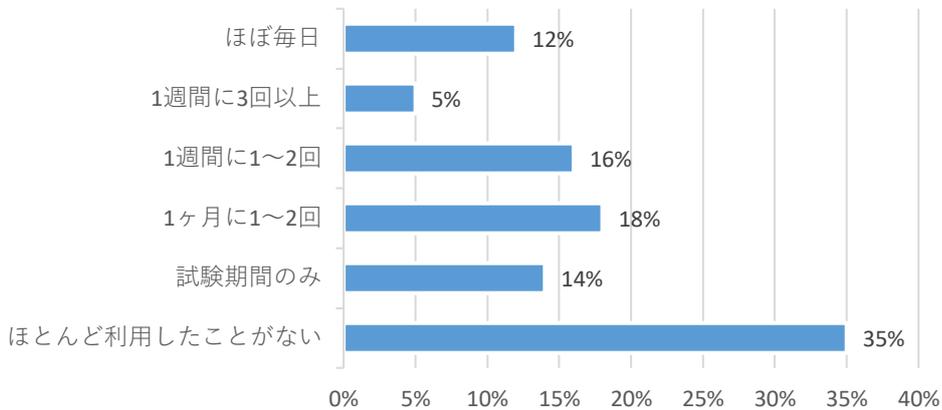
自由な人々が作り上げる独自の世界観に若い頃に巡り会ったのは幸運であった。研究者としての姿勢や目線に大きな影響を与えてくれた本と人々である。

10年ほど前に藤田先生の遺稿をもとに奥様が出版された「橄欖(かんらん)の花散りて」の表紙には、ベネチアの川面が描かれていた。隅に藤田先生のサインがあった。

## 2021年度 大学図書館アンケート結果

～学生生活実態調査より～

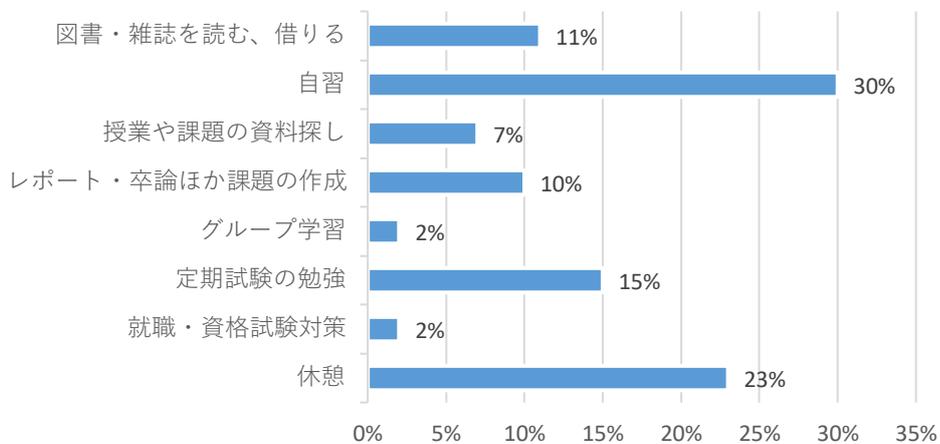
### 図書館をどのくらい利用しますか？



全体の51%の学生は、定期的に利用している。

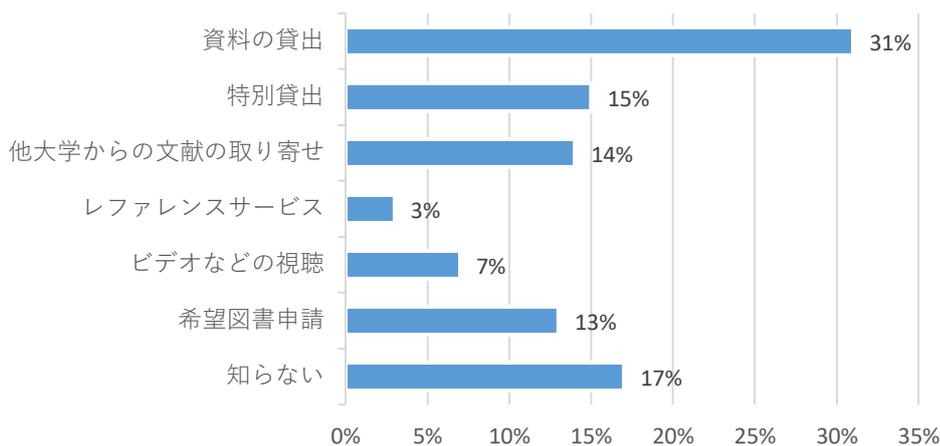
一方、学生の35%は、ほとんど利用したことがないという結果になった。

### あなたが図書館を利用する主な目的は何ですか？



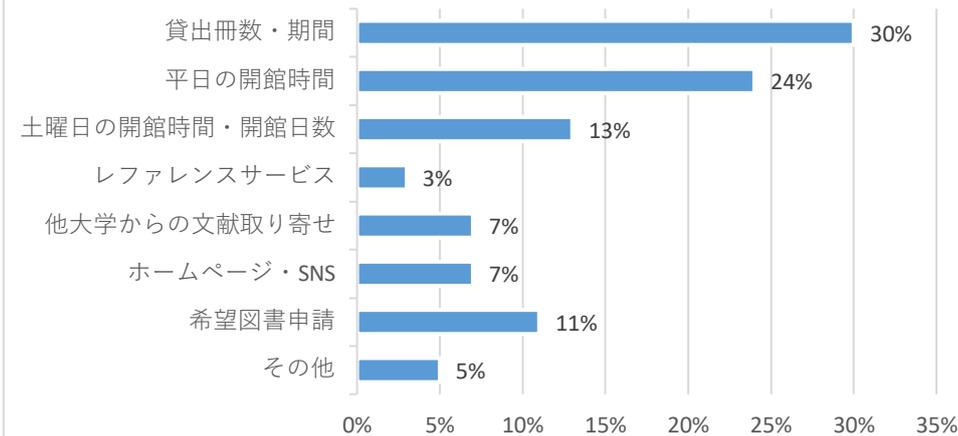
自習や定期試験、課題の作成など、個人で勉強する際に図書館を利用している傾向が見られた。

### 図書館が提供するサービスをご存知ですか？



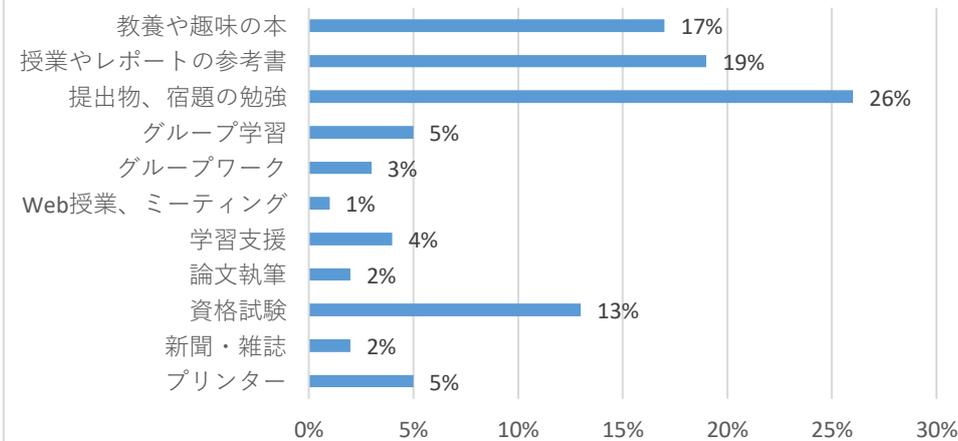
全体の80%以上の学生が何らかの図書館サービスを知っており、周知が進んでいることが分かった。

### 充実させてほしい図書館のサービスは？



貸出冊数や期間、平日・土曜日の開館時間など、基本的な図書館サービスの充実が学生に求められている。

### 利用するとしたらどのようなことをしたいですか？



専門分野に関する図書に加え、幅広い分野の資料に対する要望がある。

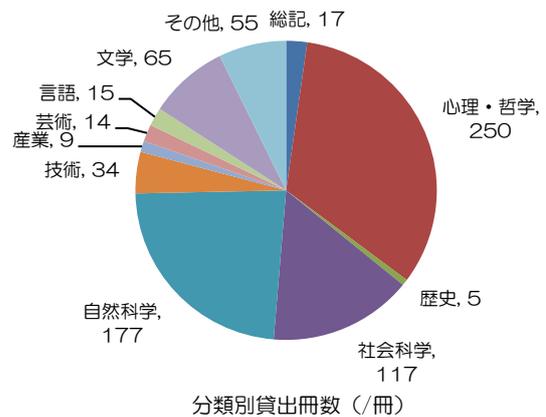
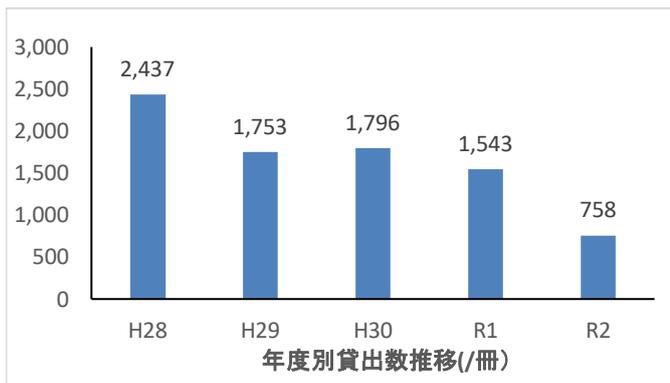
また、宿題の勉強や資格試験など自学自習のために利用したいという傾向も窺える。

#### 【自由記述】

- ・プリンターがあってほしい。（栄養・3回生）
- ・漫画を(も)おいてほしい。漫画を読みたい。（栄養・3回生/フード・心理・1回生）
- ・最新の国家試験対策本を増やしてほしい。（栄養・4回生）
- ・食に関する情報をみたい。（栄養・4回生）
- ・静かな場所で勉強するために行っても、持ち込みPCでレポートをしている人のタイピングがうるさい。（栄養・4回生）
- ・グループで集まって勉強できるスペースがほしい。（栄養・4回生）
- ・たまに全生徒へのメール通知が遅い。（フード・3回生）
- ・希望した本をすぐ入荷してもらっている。（フード・3回生）
- ・本の置いてある場所が分かりにくい。
- 特に学科に関係しないライトノベルや小説が少ないと思う。（心理・1回生）

## 2020年度図書館利用統計

開館日数	平日：166日 土日：9日 合計：175日
入館者数（学内/学外）	学内：14,744名 学外：7名 合計：14,751名 (84.3名/日)
貸出冊数	累計：758冊（年度推移、分類別貸出冊数は下記グラフ参照）
学外相互協力（ILL）（依頼/受付）	〔図書〕 受付：9件 依頼：1件 〔複写〕 受付：114件 依頼：37件
蔵書冊数	図書蔵書数：129,942冊 雑誌契約数：50タイトル（和：48 洋：2）
電子ジャーナル・データベース数	電子ジャーナル：9 データベース：1



### 【図書館を活用しよう！】 他大学などからの文献取り寄せ方法

- ① 甲子園大学図書館・短大図書館に所蔵がないか確認する⇒図書館OPACで検索
- ② 「図書館間相互利用申込書」に記入する（※用紙は貸出・返却カウンターにあります）

**記入例**

図書館間相互利用申込書 (複写・貸借)					
所属	栄・心	学籍番号	***	受付年月日	* 年 * 月 * 日
氏名	甲子園 花子		身分	教員・院生・学生・その他	
誌名 (書名・出版社)	家族心理学研究				
巻号	28(2)	頁	120 ~ 135	刊年	2015
著者	大山寧寧				
論題	喪失体験からの回復過程における家族レジリエンス要因				
支払	公費・私費・その他				
連絡先 (メールアドレス)	e*****@ps.koshien.ac.jp				

書名・雑誌名を記入

論文名を記入

必ず連絡がつく連絡先を記入してください

複写料・郵送料が必要

- ③ 図書館の窓口で申込書を提出（メールでも受付しています）
- ④ 文献の受け取り・資料の貸出（資料の到着は約1週間が目安です）

## 第1回 学生選書ツアー



学生選書ツアーは、図書館に所蔵してほしい本を学生が書店で選ぶイベントです。今年度、初の試みとして、10月26日、28日にジュンク堂書店西宮店で開催しました。

今回参加したのは、心理学部の学生6名です。(1回生1名、2回生3名、3回生2名)それぞれが学生の視点から幅広い分野の本を選書しました。

また、12月2日には、選書報告会を開催しました。各自感想や改善点を述べ合い、意見交換しました。

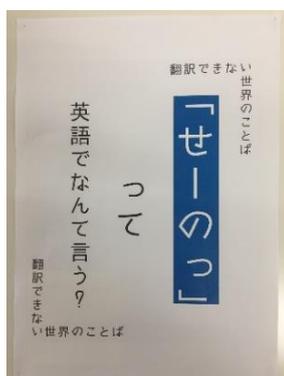


## 第4回 図書館POP大賞

図書館POP大賞は、学生が好きな本をPOPで表現するイベントで、学生の読書推進と図書館利用の促進を目的に毎年開催しています。今回は、前回より13作品多い、57作品の応募がありました。

学生・教職員の投票によって、優秀な作品が選ばれます。また、優秀な作品を制作した学生には、表彰状と副賞が授与されます。

今回の最優秀賞は、田實咲良さん(心理学部2回生)の『翻訳できない世界のことば』、優秀賞は、鈴鹿那美さん(心理学部2回生)の『しねるくすり』でした。



↑ 最優秀賞



表彰式



表彰式後の記念撮影



← 優秀賞